

## 福島県に現存する室町期・方三間仏堂の様式と断面・平面構成に関する一考察 方三間仏堂の成立と普及に関する基礎的研究 その2

A study on the style and characteristic of "Ho-Sangendo" style in Buddhism Temple

○大山亜紀子<sup>1</sup> 重枝 豊<sup>2</sup>

Akiko OYAMA, Yutaka SHIGEEDA

This paper is a part of a study on the style and characteristic of "Ho-Sangendo" style in Buddhism Temple. We examine the relation between the architectural style and section, plan. It found that from result that the architectural style of a small Buddhist temple was selected according to desing or structure for an interior space.

はじめに

中世以降、地方に展開した小規模仏堂の多くは、床板を張った和様の空間を基調としながら、軸部や軒廻り、細部意匠に禅宗様・大仏様の各種要素を自由に組み合わせた折衷様を採用された。

とくに方三間という限られた小規模仏堂においては、仏堂内部の空間をいかに構成するかということが様式選択の要因の一つであったとみられる。

本稿では前稿において分析した福島県会津地方を中心とした室町期の方三間仏堂について、和様と禅宗様を特徴付ける部位として、断面における軸部（内法長押、頭貫・台輪）と軒廻り（組物、垂木）の構成と様式に着目しながら、平面および空間構成の相関について考察を進めたい。

### 1. 断面構成にみる軸部・軒廻りの様式

軸部では和様の要素である内法長押が 4 例（No1,4,5,7）みられるが、台輪は 1 例（No1）を除いて全ての事例に採用されている。また、禅宗様の特徴の一つである詰組は 7 例（No2~5,7~9）にみられる。

台輪は頭貫と柱頂部を固め、詰組を受ける厚板であるが、その一方で台輪とともに中備（間斗束）を用いた事例（No6,10）もあることから、台輪が

軒廻りの様式に関わらず軸部の構成手法として定着していたことがうかがえる。

垂木の配置は、詰組の手法が取り入れられた 7 例のうち、扇垂木とするものは 2 例（No2,4）のみで、他は平行垂木が主となっている。

また、支柱 4 本の前列 2 本を抜く平面構成が 8 例（No2~9）にみられるが、その架構は大虹梁と大瓶束を用いた禅宗様の手法が共通している。しかし、軒廻りに詰組を用いない円満寺観音堂（No6）は、内部の柱上の組物配置においても詰組を用いていない。

### 2. 柱間構成と様式の関係

禅宗建築では、等間隔に組物を配置する詰組の手法によって、柱間寸法が組物間寸法の倍数で構成される。前項で指摘した詰組を用いた 7 例のうち、この禅宗様の手法に基づいて柱間寸法が決定されているのは 4 例（No2,3,4,7）のみである。したがって、他の 3 例（No5,8,9）は意匠的に禅宗様要素を採用したことがわかる。

### 3. 空間構成と様式の関係

以上を整理すると、完全に和様の手法を用いた旭田寺観音堂（No1）を除く 9 例が軸部・架構を禅宗様の手法に拠っている。しかし、平面の柱割

表 1 柱間・軸部・軒廻りの構成

No.	事例	年代	柱間比率		軸部		軒廻り			
			脇間	中央間	内法長押	頭貫・台輪	組物	詰組	垂木	
1	旭田寺観音堂	14c.半	1	1	○	なし	舟肘木	なし	平行(疎)	一軒
2	常福院薬師堂	1399	2	3	なし	○	出組	詰組	扇	二軒
3	奥之院弁天堂	1400年頃	2	3	なし	○	出組	詰組	平行	一軒
4	延命寺地藏堂	15c.末-16c.半	2	3	○	○	出組(主屋) 平三斗(裳階)	詰組	扇	二軒
5	成法寺観音堂	16c.初	1	1.1~1.2	○	○	平三斗	詰組	平行	二軒
6	円満寺観音堂	16c.半	1	1.1~1.2	なし	○	平三斗	中備	平行	二軒
7	八葉寺阿弥陀堂	16c.末	2	3	○	○	平三斗	詰組	平行	二軒
8	西光寺阿弥陀堂	16c.半	1	1.1~1.2	なし	○	平三斗	詰組	平行(疎)	一軒
9	福生寺観音堂	16c.半	4	5	なし	○	平三斗	詰組	平行	一軒
10	勝福寺観音堂	16c.半	3	4	なし	○	平三斗	中備	平行	二軒

1: 日大工・教員・建築 Research Associate and Lecturer, CE, Nihon Univ. 2: 日大理工・教員・建築 Prof., CST, Nihon Univ.

まで禅宗様の手法が及ぶのは 4 例 (No2,3,4,7) にとどまっている。このため、意匠的要素として、和様 (No6,10) と禅宗様 (No2~5,7~9) の 2 様式を使い分ける傾向があるといえる。

ここで内部空間の拡張方向に着目すると、様式によって大まかな傾向が読み取れる。和様を主とする 3 例 (No1,6,10) は内部空間の天井高が低く、全体的に水平方向に広がる和様の空間を構成している。その最も顕著な事例が、純和様で構成された旭田寺観音堂 (No1) といえる。内部は須弥壇を囲うように 4 本の支柱に格子状の仕切りを設けており、内陣と外陣を格子戸で分割する中世仏堂に通じる空間構成が読み取れる。

これに対して、禅宗様の手法を主とする事例では比較的天井が高く設定されており、中でも柱割・軸部・軒廻りにおいて、禅宗様の手法を忠実に

に踏襲した 2 例 (No2,4) については、その傾向が顕著である。延命寺地藏堂 (No4) においては、裳階を付加するとともに、垂直方向に伸びる高い内部空間をもつ本格的な禅宗建築を実現している。ただし、来迎柱とともに祭壇の位置が壁際に後退しており、須弥壇を中央に設置する禅宗仏殿とは異なる、礼拝空間を意識した和様の空間を構成しているといえる。

まとめ

意匠としての様式と、構造・空間構成としての様式の取捨選択があったことが読み取ることができた。限られた小規模空間の方三間仏堂において、外陣から内陣へと水平方向に展開する和様の空間と、中心性のある垂直方向に展開する禅宗様の空間がどのように構築されたのかを、様式や寸法分析とあわせて今後も検討を進めてゆきたい。



図 1 分析対象 平面図・見上図・断面図(梁行)

※図版は各種修理報告書から転載したものである。